

紀行小説『山海記』を読んで

新田 由紀子

著者の佐伯一麦は仙台市に在住し東日本大震災を体験している。本書『山海記せんがいき』は大震災被害に触発されて、稿を思い立ったものといわれる。

「四年続けた水辺の災害の記憶をたどる旅のしめくり」に、彼著者は豪雨による水害と山崩れに度々見舞われてきた奈良県南部の十津川流域を訪れる。災害の傷痕と復興の営みを見ては様々な想いを巡らす。険しい山河に育まれた歴史と住民の暮らしの断片を探りつつ、日本各地の被災談も交えて、古典や文献を引いて記していく。

十津川は奈良県南部の修験道の聖地大峰山系から流れる天ノ川を源流とし、十津川、熊野川と名を変えて紀伊山地を縦断し熊野灘に注ぐ。流域沿いの国道一八六号を走る路線バスは、奈良県橿原市と和歌山県新宮市を六時間で結び「日本一長い路線バス」といわれる。

これに乗車した彼は、地元の人言葉や乗客同士のたわいのない会話を丹念に聞き取る。律儀なバスの運転手、飲食店や土産物屋の店主、民宿の年寄りなど、激甚災害地にとどまって暮らす人々が語る災害の伝承も交えている。その様子は篤実で真摯な著者の姿を偲ばせて、読書の満足感がある。

一方、バス停の名称や旧蹟を見てその由来や歴史の文献を引くのだが、出典先は堂々たるものだ。古代中国地理書『山海経』『神皇正統記』『役行者本記』『万葉集』『続日本紀』『日本霊異記』『新古今和歌集』『源氏物語』『水鏡』『保元物語』『吾妻鏡』『愚管抄』『菟玖波集』『信長公記』『幻住庵記』『更科紀行』『野晒紀行』『南山踏雲録』『探記小録』『大塔村誌』『吉野郡水災誌』『開拓記念の懐旧録』など、引用は深みを添える。

本書はこの地域を旅する者の地誌的ガイド書ともいえよう。私もこのバス路線に魅かれて何度か乗車している。また、読後大いに共感したのは、著者が現地の含蓄ある地名にこだわり、昨今の安易な地名改変は地誌の消滅をもたらすと指摘していることだ。